

# 坂戸市格塚とその土橋をめぐって

杉崎 茂樹

## はじめに

埼玉県中西部の坂戸市入西地区では区画整理事業の実施に伴い多くの方形周溝墓が調査された。このうち唯一保存されたのが広面B遺跡の「格塚」と呼ばれる墳丘の遺存していた方形周溝墓である。事業地内で発見された周溝墓中方台部規模はもちろん、周溝部を含めた面積でも最大規模の周溝墓であった。墳丘の調査は行われなかつたので埋葬施設は不明だが、注意を引いたのはその西側方台部に付設された土橋であった。方台部西辺の中央から大きく逸れた位置に西溝に対して南方向に斜めに掘り残された、あまり類例のないもので、所謂前方後方形の周溝墓とは一見して異なる平面形態であった。

調査及び報告からだいぶ時間が経過しているが、県下の類似例とともに検討し、その性格や意義についてあらためて考えてみることにしたい。(註1)

## 1 格塚の概要と特徴（第1図）（村田ほか1990）

格塚は入間川水系の越辺川右岸の自然堤防上に所在する広面B遺跡の方形周溝墓群の1基で遺構名称はS Z 9（第9号方形周溝墓）である。越辺川は入間郡と比企郡の境界を流れる河川で広面B遺跡の南方には間近に入間台地が広がり、越辺川を挟んだ北側は比企丘陵が迫っている。現在の行政区分では入間郡の最北縁部に位置する。入西地区で方形周溝墓の発見された遺跡及び発見数は西から順に、稻荷前遺跡で35基、その北東の広面B遺跡で22基、広面B遺跡の北東に隣接する中耕遺跡で68基、3遺跡での合計は実に125基となる。

さて、この広面B遺跡の格塚の方台部の規模は検出面での計測では長辺約24.4m、短辺約22mと広面B遺跡はもとより入西地区で確認された周溝墓の中では最大規模を有しており、その方台部西辺中央から北寄りに偏った部分に南に向い斜行する土橋を、基盤土を掘り残して付設している。土橋の幅は方台部側で約5.8m、方台部の結接部には幅1m、深さ0.7mの溝が掘られている。長さは約16m、主軸は約4m近くも方台部西辺の中心から北に偏した位置となり、外方はなだらかに南方に向かい広がる形態となっている。方台部の東辺と南辺にはそれぞれ中央付近に検出面で幅1.6mと約2mの造出状の突出部を有している。

出土土器には焼成前の底部穿孔のある畿内系とされる二重口縁の壺や埴、器台のほかに吉ヶ谷系の大形壺が出土している。

## 2 近縁性を持つ方形周溝墓と前方後方墳

埼玉県域においては方形周溝墓の周溝は出現期の弥生時代中期には方台部の四隅を掘り残して周溝が途切れるものが定型的な形態であった。それが古墳時代に至る前後までに切れ目なく全周する形態に移行している。この変化がもっとも遅くなつて行われた地域が格塚の所在する

比企丘陵とその周辺、すなわち同地域を中心に広がりのあった吉ヶ谷式土器の分布圏でのことであり、この形式の土器を用いた集団の方形周溝墓の溝の形態に対する保守性の強さ、あるいは拘りを物語る現象である。柊塚でもその南側に四隅の切れる周溝墓が取り巻くように構築されていて、柊塚の築造された時期までこの伝統が守られていたことを示している。

柊塚は基本的には周溝が全周する形態の周溝墓のバリエーションと考えてよいものと思うが、その一辺の溝の幅をほかの溝より幅を広く掘り、土橋を掘り残すことを特徴としている。比較検討のため土橋を持つ大形の周溝墓を県下の調査例から探してみると、同じ入西遺跡群の中耕遺跡の第42号方形周溝墓、県南の志木市西原大塚遺跡第1号方形周溝墓、県北の塚本山14号方形周溝墓が同じような土橋を持っていることがわかる。さらに前方後方墳の諏訪山29号墳の後方部に同様な土橋があることに気づいた。

### 1) 中耕遺跡第42号方形周溝墓（第2図）（杉崎1993）

中耕遺跡は前述の通り、広面遺跡の北東に隣接する遺跡である。廃絶した前代の集落の上に方形周溝墓の墓域が形成される。周溝墓のバリエーションとしては四隅の切れるものが形成期に現れ、その後全周する形態のものが築造されていったものと思われ、42号墓は周溝墓群の形成の末期段階の築造と考えられる。調査前には0.8mほどの高さで盛土の一部が遺存しており、その断面の調査で、古墳の盛土に通有の版築と同様に堅く叩き締めて築かれていることがわかった。精査を行ったが埋葬施設の発見はなかった。

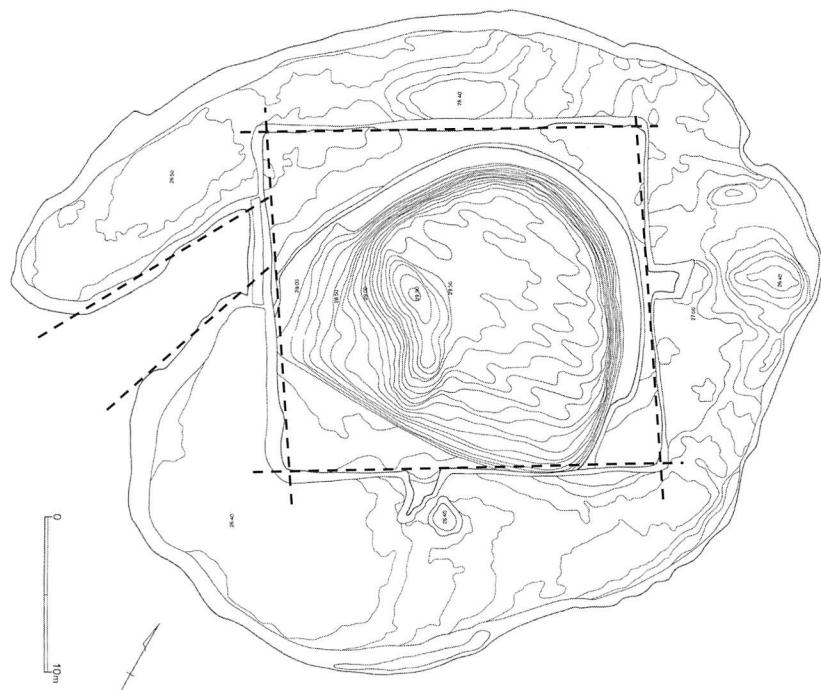
この遺構は周溝の遺存も悪く、取りわけて南西部分の周溝は遺存しておらず完全に全周する形で把握されたわけではないが、全周する形態のバリエーションの範疇で考えてよいと思われる。方台部の規模は検出面での計測では長辺約17.5m、短辺約13mで、方台部西辺の中央から南に偏した位置で、外方に土橋を付設しているものと判断できる。確実に斜行している状況は読み取れないが、方台部の中心から大きくそれた位置に土橋を付設することは柊塚との共通点である。その長さについては約11.5m程度と推定した。面積的には中耕遺跡の中ではトップクラスである。北溝の方台部中央に基部での幅約2.9mで外方に1mほど突出する不整合形の造出状の突出部を設けているのも柊塚と共通の要素といえる。

主に東溝・南溝から焼成後底部穿孔の吉ヶ谷系の無紋化した大形壺、埴、畿内系とされる二重口縁の壺、器台、高坏、装飾器台などの土器類が出土している。底部穿孔された大方の土器は焼成後の穿孔である点は柊塚より先行する築造時期であることを暗示している。

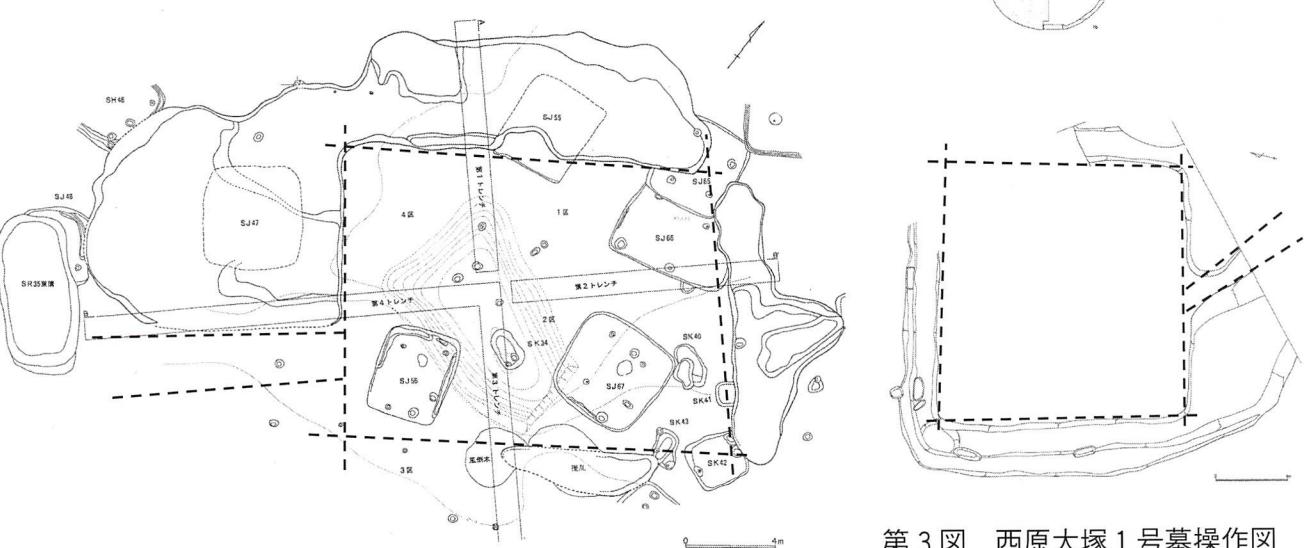
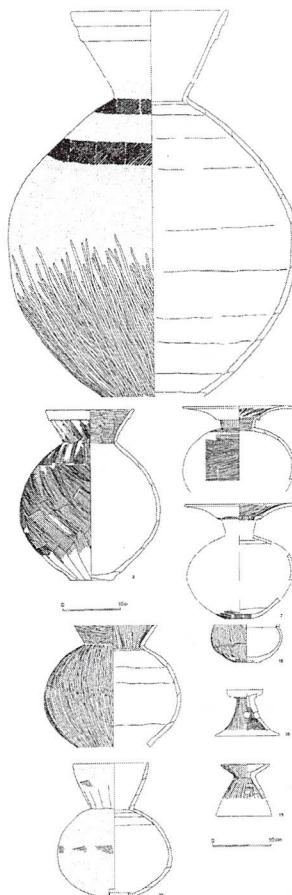
この42号墓は筆者が調査に関わった周溝墓で、遺構の遺存状況が悪いが「前方後方形」と推定して報告したものだが、あらためて検討してみると、そのように呼称することにはいささか躊躇を覚える状況となった。

### 2) 西原大塚遺跡第1号方形周溝墓（第3図）（佐々木2009）

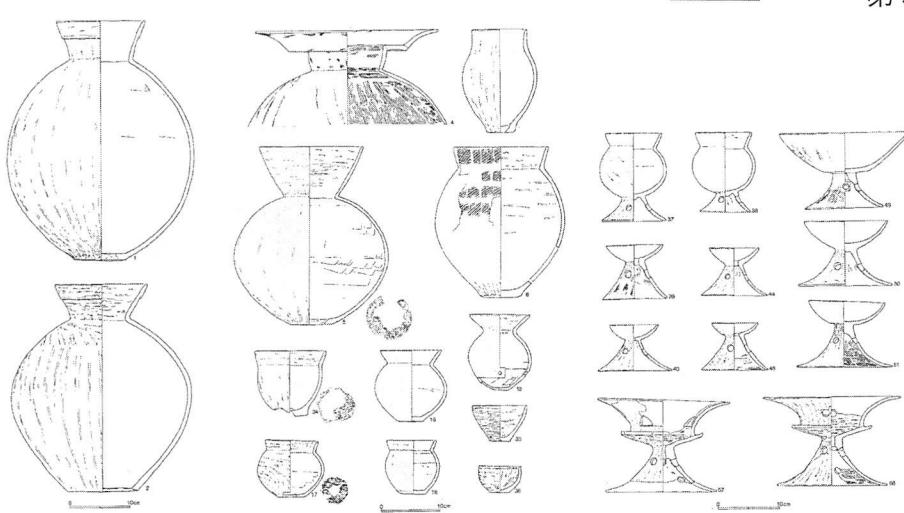
西原大塚遺跡は埼玉県南部の荒川水系の新河岸川に合流する柳瀬川右岸の台地上、志木市幸町地区に所在する遺跡である。区画整理で調査が行われ弥生後期から古墳時代前期の方形周溝墓が20基以上調査されている。そのうちの第1号方形周溝墓は北溝と東溝の一部が調査区外で全容が明らかになってはいないが、方台部の東西軸長は約14.5mと推定され、南北軸長は13.8mを測る大型の周溝墓である。方台部南辺のほぼ中央から外方に土橋が付設されて



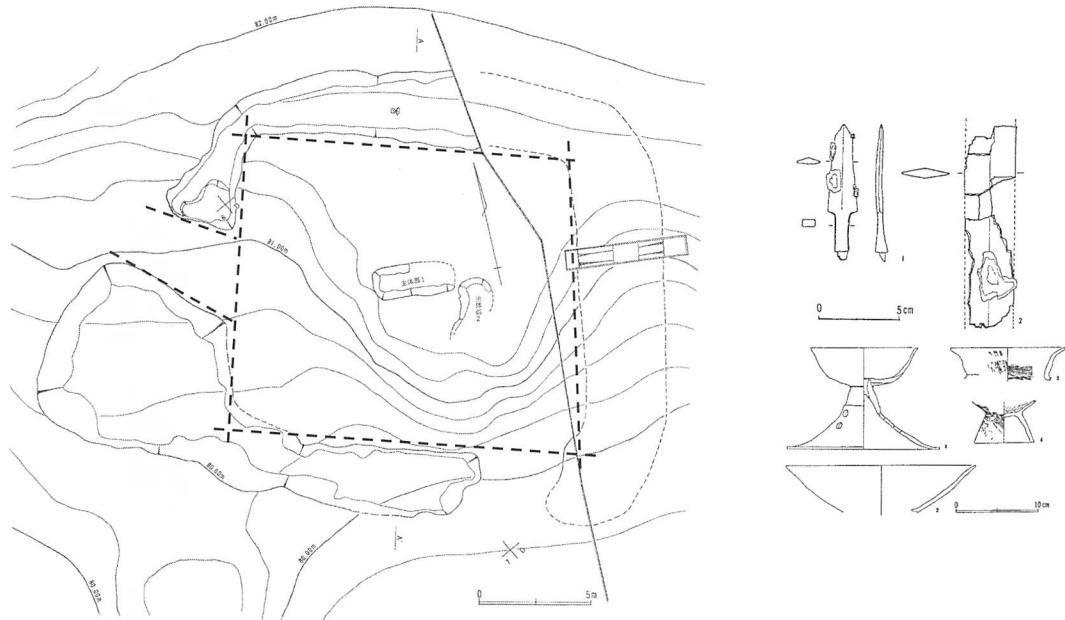
第1図 栄塚操作図及び出土土器



第3図 西原大塚1号墓操作図



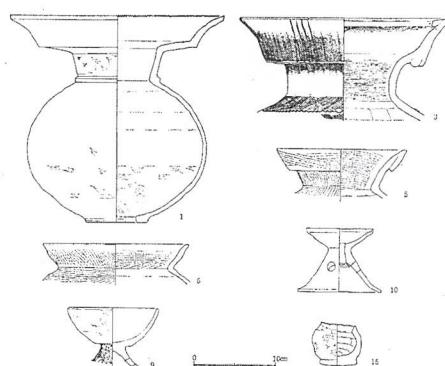
第2図 中耕42号墓操作図及び出土土器



第4図 塚本山14号墓操作図及び出土遺物



第5図 諏訪山29号墳操作図及び出土土器



いる。土橋の前方が調査区外となっていて長さは不明だが、土橋周囲の周溝はほかの溝よりもかなり幅広に掘られているのはまちがいない。土橋の検出面での規模は方台部結接部での幅が約2.5m、最も狭くなる部分では0.85mとなるが、明確な土橋である。土橋の斜行する状況は前方後方形の周溝墓とはかけ離れたものである。

弥生時代においてこのエリアは南関東系の帶縄文系弥生土器の文化圏に位置するが、築造時期を絞り込むことのできる土器の出土はない。同遺跡内ですぐ北側に近接する第10号方形周溝墓出土の高壺や甕などの土器の特徴は古墳前期でも古式な様相を持ち、畿内および周辺の特徴を持つものが含まれている（佐々木2009）。また、100mほど東南に所在する同遺跡中の既発見の周溝墓なかで最大規模の方台部を有し全周する周溝を持つ第17号墓からは縄文で装飾された壺や二重口縁壺など弥生から古墳時代への過渡期的時期の土器が出土しており（佐々木2000）、この1号周溝墓の時期もこうした周溝墓とほぼ同時期である可能性が高い。なお、志木市内では前方後方墳は確認されていない。（註2）

### 3) 塚本山第14号方形周溝墓（第4図）（増田ほか1977）

埼玉県北部の児玉郡美里町の小山川左岸には大久保山と呼ばれる独立丘陵がある。塚本山周溝墓群はその大久保山の南部裾部に所在する。関越自動車道建設に伴い9基が発掘調査された。実態の不明な部分の多い全長約60mの前方後方墳とされる鷺山古墳は西方に800mほど離れた低い丘陵上に築造されている（増田ほか1986）。この地域は弥生時代末において吉ヶ谷式と群馬県西を中心とする樽式土器の分布が重なる地域である。

さて、塚本山14号墓は調査前には1.5mほどの墳丘が遺存していて、埋葬施設である土壙が2基確認されている。東側の溝が調査区外となるが、その一部がトレンチ調査で把握されていて方台部南北を長辺としており約16mと推定される。短辺は東西方向で約13.8mである。方台部西辺のほぼ中央を約4.2mの幅で掘り残し、北西外方に約4.3mの長さの土橋が付設されている。土橋は外方の幅が方台部側より狭まっており、方台部から外方に向かい左手の周溝は他の箇所より幅広に掘られている。斜面部に構築されているため、標高の低い側の遺存がよくないが方台部の南辺東コーナー寄りにも土橋が確認されている。盛土中から埋葬施設が2基検出されていて、それぞれ東西方向と南北方向に長軸を置いており、そのうちの一基の覆土中から鉄剣の破片が出土している。また、周溝からは高壺や台付甕の台部破片などが出土している。

### 4) 諏訪山29号墳（第5図）（増田ほか1986）

諏訪山29号墳は東松山市西本宿の都幾川右岸の高坂台地北縁部に立地している。入西遺跡群の北方約5kmの距離にある。埼玉県史編さん室が1984年に発掘調査しているが、古墳の築かれている台地の崖の崩壊の進行で古墳もその北半部分が失われていることやトレンチ調査によるため、周溝の形態等も全容がつかめておらず、特に前方部に不確定要素が多い。埋葬施設も不明である。

報告書によれば復元主軸長は約53m、後方部の主軸長29m、幅は推定となるが約25m前後、現存する墳丘高は後方部約3.6m、前方部約1.6mである。周溝は検出された後方部の裾と掘り方上部が必ずしも平行にならず、後方部くびれ部付近では墳丘と相似形とは認めがたい。

発掘調査により後方部北西辺の中央から南に偏った位置に、西外方に向い右に斜行する土橋が確認されている点は重要である。墳丘の裾とされる部分から土橋外方端までは約8m、最も狭い部分での幅は検出面で約2mを測る。

周溝からは甕や器台のほか、焼成前に底部穿孔された所謂「茶臼山型」と呼ばれる畿内系の二重口縁壺や口縁部に駿河地方の大廓式の特徴を持つ壺が出土している。

### 3 土橋が方台部の中央を外れたり斜行したりする理由

方形周溝墓の周溝を掘り残して取り付けられた土橋が斜行し、あるいは方台部辺中央部を避けて設置されるのはひとり終塚のみに見られるものでなく県下の大形の周溝墓あるいは前方後方墳にも見られることを前節で例示した。

北武藏域の方形周溝墓は方台部四隅部分の溝を掘り残した形態が導入時点での定型化した形態であった。この掘り残した部分は四隅の角の方台部辺の交点に正確に設置された結果、方台部各辺とは斜行する形態となっている。この部分は被葬者の埋葬に当たる人々が方台部に至りまた外部に戻るための葬送の通路として機能していたことに間違いない。

やがて古墳出現期までに四隅の切れる周溝形態から全周する形態へ移行するに至って、なお土橋を何れかの辺の一か所に設置しなくてはならない状況があり、そこに、それまでの伝統に即した斜めの土橋が敷設された可能性を考えたい。中耕42号墓では方台部の西辺に対し斜めではなく、ほぼ直線的な土橋の形態の想定も可能であるが、その位置は南の角方向に偏った位置となり、方台部中央、言い換えれば埋葬施設に墳墓としての施設に外方から正対して出入りすることを憚る考えがあつてのことと思われる。

### 4 前方後方墳との関連

前方後方墳である諏訪山29号墳の後方部にも斜めの土橋を有することを紹介した。後方部の墳裾の中央を外した位置に墳丘から周溝を跨ぐ外方と連絡する土橋を設置しているのは、まさに終塚などの方形周溝墓に見られる、偏った位置に設置された斜行する土橋と共通する考えによるものと思われる。埼玉県域において前方後方墳の後方部で斜行する土橋が確認されているのは諏訪山29号墳1例のみであるが、このことから、終塚に見られる墳丘構造が前方後方墳の後方部に持ち込まれ、それに前方部が付設されて前方後方墳の構造が出来上がったのではないかとの推定が十分可能であり、類例の確認が待たれる。

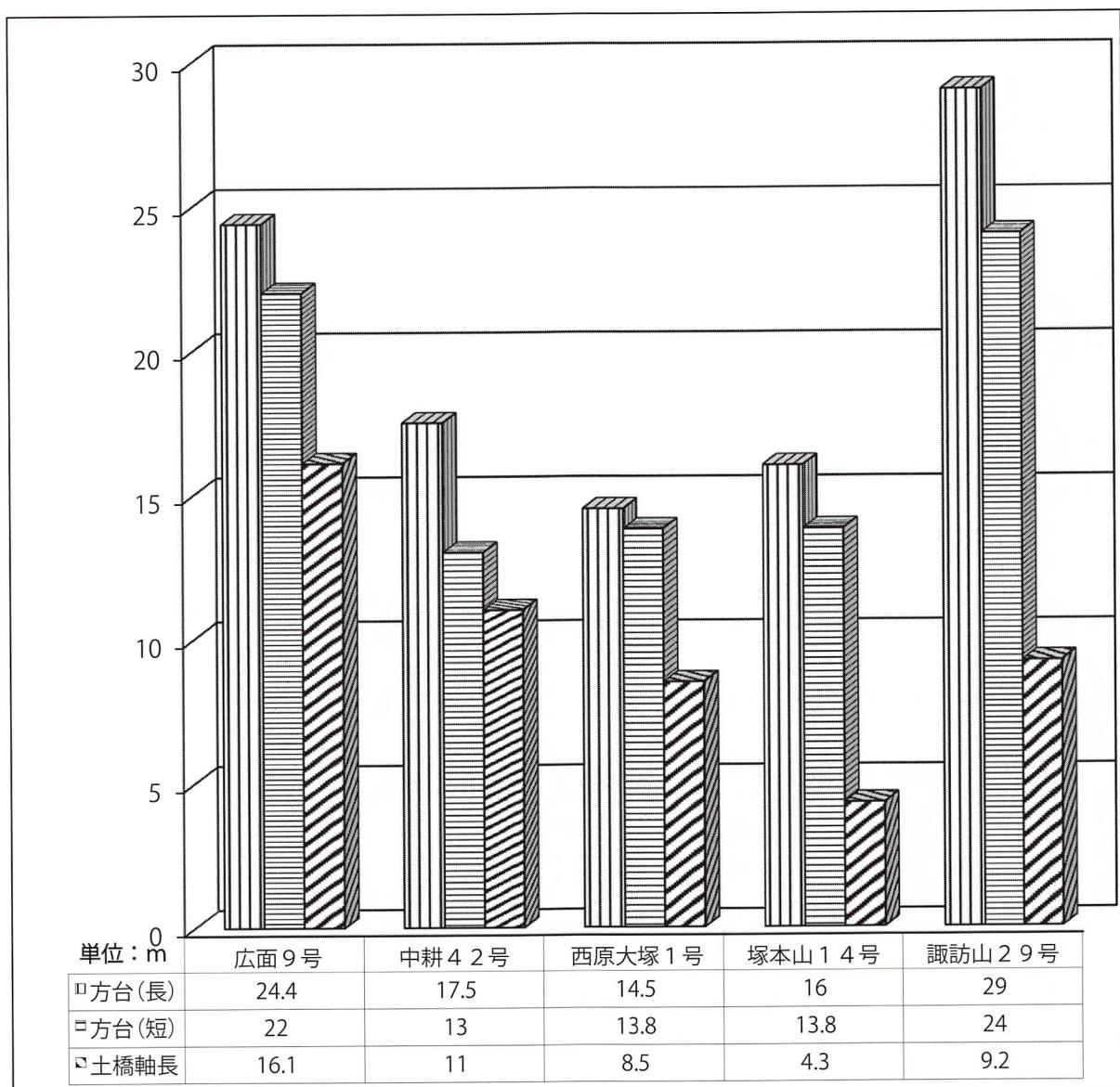
終塚との築造時期の前後関係の比較材料として、諏訪山29号墳にも共通の畿内系二重口縁の壺型土器がある。口縁部の外方に屈曲して開く部分の造作に諏訪山29号墳のものに形骸化が認められるが両者とも焼成後の穿孔を有しており前後関係を判断するのは難しい。しかし、弥生時代から古墳時代社会への移行期には、在地の集団間でも集権化の流れがあり、その内で墳墓の時系列的変遷を考えるなら、すでに近江～東海地方で出現していた前方後方墳を受容して当地で構築するに当たり、後方部にこの地域で発展してきた周溝墓、しかも集団の中では労働力を集約できる立場にある人物の周溝墓の形態である斜行土橋を有する大形の周溝墓の方台部を組み込んだものとして前後関係を考えるのが自然であろう。こうした解釈が許されるならば、終

第1表 規模の比較

(単位: m)

名 称	方台(長)	方台(短)	土橋軸長	偏差 ※	備 考
広面9号	24.4	22	16.1	1.53	
中耕42号	17.5	13	11	0.66	土橋軸位置・軸長は推定
西原大塚1号	14.5	13.8	8.5	1.06	土橋軸長は推定
塚本山14号	16	13.8	4.3	1.08	
諏訪山29号	29	24	9.2	0.79	後方部(=方台部) 短軸長は推定

※ 偏差は土橋の取り付く方台部中央から外方に向かい土橋主軸が右に偏る場合は1より大、左に偏る場合は1より小となる。



塚やこれに類する大形方形周溝墓の斜行する土橋や偏った位置に取り付けられた土橋は前方後方墳の後方部の原型であり、前方部へ発展したものではないということになる。

### まとめにかえて

埼玉県下屈指の規模の周溝墓である柊塚はその斜行土橋の共通性を鍵にして出現期の前方後方墳の後方部そのもののベースとなった可能性を述べた。柊塚はまさに比企地方に首長権力の発生を示す前方後方墳が出現する直前段階の記念物的周溝墓といえるのだろう。

本稿で取り扱った周溝墓と古墳の規模を第1表で比較した。土橋の長短や取り付く位置の偏差はいろいろで、土橋の向きや方角の指向性ははっきりとは認められないが、こうした全周系周溝で土橋を持つ大形周溝墓の次世代の被葬者こそが前方後方墳の被葬者に昇華していったと考えられる。

県内の古墳出現期の首長墳の形態は前方後方墳である。その出現のメカニズムや出現以後に築造された方形周溝墓との相互の影響は決して単純ではないと思われる。近年の調査例の増加もあり、そうした点については、調査成果である報告書の刊行を待ち別稿で検討してみたい。

### 【註】

- (1) 古墳出現期の方形墳墓の生成と発展については田中新史氏の集成と分析がある(田中1984)。同氏の分類では柊塚はBⅡに該当しよう。また、伊藤敏行氏の分類ではFタイプとなる(伊藤1986・1988)。いずれにせよ柊塚の土橋を含めた平面形態は「前方後方形」とはきちんと峻別すべきであると考えている。
- (2) 現在のところ西原大塚1号墓と最も近い前方後方墳はふじみ野市(旧上福岡市)滝に所在する権現山2号墳で、直線距離で約7kmである。(上福岡市教育委員会1999)

### 【文献】

- 伊藤 敏行 1986 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅰ」『研究論集Ⅳ』 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 伊藤 敏行 1988 「東京湾西岸流域における方形周溝墓の研究Ⅱ」『研究論集Ⅵ』 (財)東京都埋蔵文化財センター
- 上福岡市 1999 「上福岡貝塚と権現山遺跡群」『上福岡市史資料編第1巻』
- 佐々木保俊ほか 2000 『西原大塚遺跡第45地点』 志木市遺跡調査会
- 佐々木保俊ほか 2009 『西原大塚遺跡』 志木市遺跡調査会
- 杉崎 茂樹ほか 1993 『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 中耕遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中 新史 1984 「出現期古墳の理解と展望」『古代第77号』 早稲田大学考古学会
- 増田 逸郎ほか 1977 『埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集 塚本山古墳群』 埼玉県教育委員会
- 増田 逸郎ほか 1986 「鷺山古墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 増田 逸郎ほか 1986 「諏訪山29号墳」『埼玉県古式古墳調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 村田 健二ほか 1990 『埼玉県埋蔵文化財長蛇事業団報告書第89集 広面遺跡』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団